

Discourse Marker の一考察(1)

—An Experimental Study of Discourse Markers (1)—

松 尾 文 子

0. はじめに

0.0 言語と伝達

人間が言語を使う第一の目的は「伝達」である。話し言葉でも書き言葉でもそうである。話し手(書き手)は聞き手(読み手)¹⁾が理解できるように発話し、聞き手は自分の発話を通して話し手の発話を理解したことを示す。これが伝達の原則である。心理的には、当然のことながら、人間は相手に良い印象を与え、自分の望むことを相手にしてもらえるように話を運ぼうとする。

0.1 二つの語用論

最近の語用論の研究には二つの大きな流れがある。一つは、G. Leech が中心となる、言語使用の社会的側面に重きを置いたものである。彼は Grice の Cooperative Principle (CP) では、sense と force の関係が十分に説明できないので、CP を補足し、しかも CP より上位にあり優先させるべき原則として、Politeness Principle を導入した。

一方に、Sperber and Wilson が中心となる言語使用の認知的側面に重きを置いた研究がある。彼らは Grice の主張する四つの maxim は「関連性の原理」一つで説明できるとし、伝達のメカニズムを明らかにしようとしている。人間の認知作用は“relevance-oriented”²⁾、つまり、relevance な発話だけをしようと努力し、聞き手は Optimal Relevance (最も関連性の高い解釈) を選ぶ。

*Presumption of optimal relevance*³⁾

- (a) The set of assumptions {I} which the communicator intends to make manifest to the addressee is relevant enough to make it worth the addressee's while to process the ostensive stimulus.
- (b) The ostensive stimulus is the more relevant one the communicator could have used to communicate {I}.

*Principle of relevance*⁸⁾

Every act of ostensive communication is the most relevant one the communicator could have used to communicate {I}.

他の条件が等しければ、情報を処理する mental process の労力が小さければ小さいほど relevance の度合いが高くなる。

Leech の研究は social な面を強調したもので、一方 Sperber and Wilson は mental な面を強調したものであるが、いささか心理学的妥当性に欠けるきらいがある。両者の長所を生かした論はないのだろうか。

0.2 Informativeness

ある発話が informative であるとは、聞き手にとって新しい情報、つまり予測可能性が低い情報を話し手が与えたときに言えることである。しかし、これは単に聞き手の認知環境を変えるだけであり、informative な発話なら全てが relevant であるとは限らない。伝達は、話し手と聞き手に共有される認知環境を変え、それをもとにさらに談話が展開して初めて成功する。話し手は聞き手に情報価の高い情報を与え、談話を進めて行く上で好ましい対人関係 (social interaction) を作らねばならない。これを、本論では communicative informativeness であると考えたい。情報の伝達は “dynamic interactive process”²⁴⁾ であり、情報の地位は談話の進展にとっても変化する。⁵⁾

0.3 Discourse Markers⁶⁾

Discourse Markers (DM) の多くは固有の (semantic) meaning をもたず、⁷⁾ コンテキスト⁸⁾ の中でこそ機能する。発話がコンテキストの中で適切な位置を占め、談話がまとまりのあるものになったとき、談話の coherence

が確立されたことになる。

本論では、DMの well, now, oh を例にとって、texts (情報、認知的側面) と participants (話し手と聞き手、対人的側面) に関して、この三語がどのように働くのか、communicative informativeness を達成するためにどのように機能するのか、考えてみたい。

1. 概説

1.0 well

情報構造から見ると、先行の発話と well 以下の発話とは結びつきが強く、先行の発話から考えられる期待と後続の発話内容の間に不一致がある。話し手と聞き手の関係から見ると、会話の主体は話し手であるが、聞き手は協力を求められている。「あなたの期待に100%応えることができるわけではないけれど、そのように努力している(ふりをしていることもあるが)のですよ」ということを聞き手に察して欲しいのである。

1.1 now

情報構造から見ると、now は先行の発話と後続の発話を切り離す役割を担う。重要であり、注目して欲しいのは後続の発話である。話し手と聞き手の関係から見ると、well よりずっと話し手主体の度合いが高く、話し手は談話を新しい方向へもって行こうとしている。

1.2 oh

情報構造から見ると、oh はそれが新情報であれ旧情報であれ、予期した情報であれ予期しない情報であれ、一応その情報を受けとめたことを示す。情報を与えるという聞き手の働きかけによって話し手は oh を使い、その情報が共有されたことを合図し、情報の地位が変わってさらに談話が進展する。

2. 談話のひき継ぎ；文頭位

2.0 well

先行の情報から考えると後続の情報は聞き手にとって好ましくない、あるいは予期しないものである。したがって、それを伝えることに対する話し手の思案、ためらい、聞き手との関係への気使いが示される。また、発話場面の共有の協力を聞き手に求めることもある。

先行の発話では、副支配人はそれまで Miss Marlowe の指輪を盗んだ犯人は Tracy だと主張していた。

- (1) Thirty minutes later the assistant manager walked into the office, smiling. “Well!”⁹⁾ he said. “Miss Marlowe found her ring. She had misplaced it, after all. It was just a little mistake. — S. Sheldon, *If Tomorrow Comes* (30分後、副支配人が笑みを浮かべて事務室に入って来た。「いやね、マーロウ嬢の指輪が見つかったよ。結局、違う所に置いてたんだってさ。ちょっとした勘違いだな。)」

「私」は、ある詩の一節を知りたくて旧師のトーチアナ教授に電話をした。

- (2) “I want it to be exact,” I said. “Do you want to look it up or something?”
 “It’s correct the way I gave it to you,” Torchiana said.
 “Well…thanks,” I said.

He hung up. — B. Greene, *Lines from the Heart* (「その一節を正確に知りたいのですが。調べるか何かしていただけますか。」「私が言った通りだよ。」とトーチアナは言った。「そうですか…いや、ありがとうございました。」電話が切れた。)

well は、しぶしぶ相手の言いぶんを容認したことを表す。ここでは、“You may be right, but…”¹⁰⁾ とパラフレイズされ、話し手はこの後に「でも、もう一度確かめて下さいよ。」とでも言いたかったのであろう。

この語には、相手に対するある種の恐れがこめられているが、その裏を考えてみるならば、相手が怒ることによって自分が傷つくのは嫌だから、

先手を打ってやろうという心理がうかがえる。

2.1 now

話し手は聞き手に、先行の情報とは関係なく後続の情報に注目して欲しがっている。談話を新しい方向に進めたい気持ちが強く、聞き手の行動を話し手のペースに引きずりこむ強制力がある。

ロイドが退任演説を終え、いよいよ銀行の新しい頭取を選ぶ場面。彼は談話を自分の意図する方向へ進めたい。and や then と共起することが多い。

- (3) When the clapping died away, Alan Lloyd rose for the last time as chairman of Kane and Cabot.

“And now, gentlemen, we must elect my successor…”—J. Archer, *Kane and Abel* (拍手が静まると、アラン・ロイドはケイン・アンド・キャボットの頭取として最後の腰を上げた。「さて、諸君、我々は私の後継者を選ばねばなりません。」)

- (4) Two hours later the money arrived in a large sack. Grangier said to Tracy, “You’re checking out of the Palais. I have a house up in the hills that’s very private. You will stay there until we set up the operation.” He pushed the phone towards her. “Now, call your friend in Switzerland and tell him you’re buying the big press.”—S. Sheldon, *If Tomorrow Comes* (二時間後、大きな袋に入った金が届いた。グランジェがトレーシーに言った。「おまえはパレ(ホテル)をチェックアウトしろ。丘の上におれの秘密の家がある。手はずが整うまでそこにいろ。」そう言うと彼女に受話器を押しつけた。「さあ、スイスにいる友達に電話してデカイ印刷機を買いたいと言うんだ。」)

2.2 oh

先行の発話をひき継いで、あるいは先行の発話とは切り離して、積極的にさらに談話を進展させるとき、oh は用いられにくい。oh は情報を受け

とめたことを示すのが主な機能だからである。

3. Pre-cosing の方策

3.0 well

話し手は well によって話を切り上げる合図をし、聞き手に次の動きを、あるいはやむなく話を終えなければならないのなら、そのことを察して欲しがっている。聞き手のことを気使いつつも、結局は自分に協力してくれることを望んでいる。

- (5) We had been talking for nearly two hours. Nixon appeared to be growing tired.……With no warning, he put his hands on his knees and said, “Well, anyway, I have to knock this off.”

— B. Greene, *Reflection in a Wary Eye* (私達は二時間近く話し続けていた。唐突に、彼は膝をたたいて「さてと、ともかくこの辺で終りにしなければならんな。」と言った。)

anyway も難しい語であるが、ここでは in any case とほぼ同じ意味で、Ball によると、“no matter what the circumstances (are / might be)”¹¹⁾である。この文では、“Even if the circumstances were such that I (we) wanted to talk” とでもなろう。

3.1 now, oh

now は話し手が新しい方向にさらに談話を進めるときに、oh は情報を受けとめたことを示すときに用いられるので、この用法では見つからなかった。

4. 応答

4.0 well

相手の問いに答えはするが、その答えは好ましくない（であろう）ものである場合、どうしても返答が遅れる。しかし、あくまで話し手は答える意志はある。そのところを聞き手に察して欲しい。話し手は思案してい

るのだから、後述の oh とは異り、反射的・無意識的な応答ではない。

- (6) “Thank you, sir,” William hesitated. “She seemed to have some sort of fit. Is that normal?”

William’s words chilled the doctor. He too hesitated.

“Well, not quite normal. But she’ll be all right once she has had the baby…” — J. Archer, *Kane and Abel* (「よろしくお願ひします。」ウィリアムはためらってから続けた。「母は何かの発作を起こしたようです。正常なのでしょうか。」ウィリアムの言葉を聞いて、医者はぞっとした。彼もためらってから答えた。「そうだな、完全に正常とは言えないな。しかし、赤ん坊が生まれたらよくなるだろう。…」)

ウィリアムは次期頭取を目ざしている。between you and me という句を挿入することによって、意識的に応答を遅らせ、この例では相手に気をもたせている。

- (7) “What’s that?” said William, trying not to sound anxious.

“Well, between you and me, the other vice-chairman, Ted Leach, was rather expecting to be appointed chairman himself. In fact, I think I would go as far as saying that he anticipated it.…” — *Ibid.* (「どうしたんです？」ウィリアムは平静を装いながら尋ねた。「あのう、ここだけの話ですが、もう一人の副頭取のテッド・リーチが、自分が頭取に任命されるものと思っていたのです。実際のところ、期待していたと言った方がよいでしょう。…」)

Schiffrin (1985) によると、well は yes-no 疑問文よりも wh 疑問文の答としての方がより多く用いられる。yes-no 疑問文でも、それが何か情報を求める内容であったり、いったん Yes と答えた後で付け加えるべき情報があるときには、well もその答えとして用いられることがある。つまり、“answer options” の数が多い疑問文の応答に用いられるということだ。これは、well が話し手の思索・熟考のしるしとなることによるのであろう。

「そうですね、あのう」という意味の well は、自分がちゅうちょして

いることを表すが、また質問した相手に気をもたせる効果もある。ちゅうちょ、ためらいといった気持ちが、かえて自分の主張を聞いてもらいたい、認めてもらいたいといった自己主張になってしまう恐れもある。

4.1 now

now は先行情報と切り離して新しい動きを始めることを示すのだから、先行の発話に対する応答としては用いられない。

4.2 oh

情報の確認、容認、認識を表す oh は、当然応答で用いられる。ただし、well とは異なり、反射的・無意識的反応であることが多い。

(8) I do not know how to have lunch.

Oh, I know how to eat a sandwich or go to McDonald's. I know how to put food down my gullet in the middle of the day.……

What I can't do is have a business lunch.

— B. Greene, *Business Lunch* (昼食の食べ方を知らないのだ。《え、そんなことも知らないのかい。》¹²⁾いや、サンドウィッチの食べ方やマクドナルドへの行き方ぐらいはわかる。一日の真中にどうやって食べ物を食道に通すのかはわかっているのだ。……私にできないのは、ビジネスランチだ。)

(9) “Do you know what fired means?”

“You don't have a job.”

“Well, I wasn't precisely fired. The company I worked for moved, and now I'm looking for a new job.”

“*Oh*.”

“And I'll have one soon.”— A. Corman, *Kramer versus Kramer*
(「クビになるってどういうことか知っているのかい?」「お仕事がないってことでしょ。」「まあそんなところだけど、正確に言うとパパはクビになったわけじゃないんだ。パパの会社が引っ越しちゃったか

ら、今新しい仕事を探してるんだよ。」「ふうん。」「それで、もうすぐ見つかるのさ。』)

(10) He looked at her curiously. “What was it you wanted to see me about, Miss—?”

“Tracy whitney. I’m Doris Whitney’s daughter.”

He stared at her blankly for an instant, and then a look of recognition flashed across his face. “Oh, yes. I heard about your mother. Too bad.”—S. Sheldon, *If Tomorrow Comes* (彼は物珍らしそうに彼女を見つめた。「どういふことで会いに来られたのかな、ええと——」)「トレーシー・ホイットニーです。ドリス・ホイットニーの娘です。」彼は少しの間彼女をぼかんと見つめていたが、やがてわかったという表情が現れた。「ああ、そうですか。お母様のことは聞きました。お気の毒でしたね。』)

(9)は情報の確認、(10)は容認、(11)は自分がトレーシーの母親を死に追いやったことを思い出して、彼女が誰なのか認識したことを表している。

5. 訂正

5.0 well

話し手が自分の発話した先行の情報を自己訂正したり、他の話し手による先行の情報を訂正するときに使う。ただし、自分以外の人による情報を訂正するときは、well のもつ思案、ためらい、聞き手との関係への気使いといった含みにより、即座に間違いだと決めつけるのではなく、一応肯定してみせてから訂正することが多い。

(11) The man, whose name is Ringo Starr, said, “You can talk about it and talk about it until the cows come home. I don’t know why it happened to us. Well, actually I do know, or I think I know…”—B. Greene, *The Four of Us* (リンゴ・スターという名のその男は言った。「そのことについては何とでも言える。いつまでも言うがいいさ。どうしてこうなったのか、ぼくにはわからない。いや、本当はわ

かっている、わかっていると思うんだ。……」]

(12) “This is Tracy Whitney.”

“Hi,” Amy said…

*I won't let her touch me.*¹³⁾

“Are you going to be my new nanny?”

“Well, I'm going to help your mother look after you.”—S. Sheldon, *If Tomorrow Comes* (「こちらは、トレーシー・ホイットニーさんよ。」「こんにちは。」エイミーは言った。……『私にかかわって欲しくないわ。』『私と遊んでくれる新しい人なの?』『あのおね、あなたのママがあなたを世話するのをお手伝いするだけよ。』)

5.1 now, oh

now は先行の情報と後続の情報とを切り離すときに用いられるのだから、先行の情報を訂正するには用いられない。

oh の場合、well のようなやり方で訂正を表すことは困難である。oh は情報の容認を示すのだから、たとえば oh を含む発話でいったん情報を受け入れた合図をしておいてから少し間をおいて、思い直して訂正する、といった方法なら考えられるであろう。

6. むすび

以上、well, now, oh の機能を述べてきたが、これら三語を簡単に言えば次のようになる。well: 先行情報に対する反応を示す marker. now: 談話の進展を示す marker. oh: 情報の容認を示す marker.

次例は、父親が息子の世話をしてくれる人を探している場面である。oh で先行の情報の容認を、well で依頼人(父親)の要望に反応して思案していることを、now で新たな進展を合図する。

(13) “Someone who speaks good English, Mrs Colby.”

“Oh, good English. Well, now you're talking closer to a hundred-five a week than ninety to a hundred.” —A. Corman, *Kramer versus*

Kramer (「きちんとした英語を話す人をお願いします, コールビーさん。」「ええ, きちんとした英語ね。ええと, そうすると, 週90ドルから100ドルじゃ無理, 105ドルということになりそうね。)」

下の表は各語がどのように *communicative informativeness*——伝えるに値する情報を談話の参与者である話し手と聞き手の関係において伝える——を達成するかを記したものである。

| | 情報構造 | 対人関係 |
|------|---|---|
| well | 先行の情報と後続の情報の不一致。後続の情報は好ましくない, 予期しないこと | 話し手の聞き手に対する気使い。聞き手に理解への協力, 場面共有の協力を要請。聞き手を気使いつつの話し手主体 |
| now | 先行の情報と後続の情報の分離。談話を新しい方向へ進展させる。 ¹⁴⁾ | 話し手が聞き手の行動をコントロール。状況を望む方向へ運ぶ話し手主体。 |
| oh | 先行の情報の確認, 容認, 認識の合図。情報の共有を確認した上で談話が進展。 | 聞き手(相手側)の働きかけにより, 話し手は情報の共有を合図。 |

この三語の中で最も複雑な心理的要因をもつのは *well* である。「あなたにとってあまり好ましくないことを言うのですが」と合図することは, 話し手の思案やためらいを表す一方, ぜひ事情を理解して欲しい, 何とか自分の気持ちをあなたにも共有して欲しいという共感の強制にもなりかねない。自己防衛と裏はらに自己主張していることになる可能性さえある。

談話を理解するには言語的に観点からだけではなく, 社会的・対人的な相互活動としての談話(とくに会話)の性質をも考慮しなければならない。

脚 注

1. 以下, 話し手, 聞き手と言う。

2. D. Sperber, and D. Wilson, *Relevance* (Massachusetts: Harvard University Press, 1986), p. 46.
3. *Ibid.*, p. 158.
4. D. Schiffrin, *Discourse markers* (Cambridge: Cambridge University Press, 1987), p. 29.
5. D. Schiffrin "Conversational Analysis," *Linguistics: The Cambridge Survey III*, ed. F. J. Newmeyer (Cambridge: Cambridge University Press, 1988), p. 262.
6. 他に, connective, あいづち語, 談話標識などのような呼び方があり, タームはまだ確立されていない。
7. you know, I mean のように, 文字通りの意味をかなり反映したものもある。
8. コンテキストに関してはさまざまな議論がある。たとえば Smith (1982), Newmeyer (1988) を参照。いずれにしても, 発話は context-bound である。つまり, いかなる発話でも, 話し手が聞き手に対して特定の時に特定の場所で行なうのである。
9. 以下, イタリック体の部分は, 特に断わりのない限り, 著者による。
10. W. J. Ball, *Dictionary of Link Words in English Discourse* (London: Macmillan, 1986), p. 118. 同書によると, この場合のイントネーションは, Rise-fall になると言う。
11. *Ibid.*, p. 57.
12. 〈 〉内は著者による補足である。
13. 本文ではイタリック体になっている。彼女の心の動きを表わしている。
14. now に関して, 本稿を書いた後でさらに考えてみた。先行の情報と後続の情報の分離ということを裏返して言えば, あまり関連性のない話題を結びつけるとも言える。そうすると, うまく説明がつく例もあるようである。

参 考 文 献

- Ariel, M., "Retrieving propositions from context: Why and how" *Journal of Pragmatics* 12, pp. 567-600. 1988.
- Baker, C., "This is just a first approximation, but..." *CLS* 11, pp. 37-47. 1975.
- Ball, W. J., *Dictionary of Link Words in English Discourse*. London: Macmillan, 1986.
- Brockway, D., "Semantic constraints on relevance" in Parret (eds.), *Possibilities and Limitations of Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 57-78. 1981.
- Giora, R., "On the informativeness requirement" *Journal of Pragmatics* 12, pp. 547-65. 1988.
- Halliday, M. A. K. and Hasan, R., *Cohesion in English*. London: Longman, 1976.
- Lauerbach, G. E., "We don't want war, but..." *Journal of Pragmatics* 13, pp. 25-51.

-
- 1989.
- Leech, G. N., *Principles of Pragmatics*. London: Longman, 1983.
- Levinson, S. C., *Pragmatics*. Cambridge: CUP, 1987.
- Newmeyer, F. J. (ed.), *Linguistics: The Cambridge Survey III*. Cambridge: CUP, 1988.
- Schiffrin, D., "Conversational coherence: The role of *well*" *Language* 61. 3, pp. 640-67. 1985.
- , *Discourse markers*, Cambridge: CUP, 1987.
- , "Conversation Analysis" in Newmeyer, F. J. (ed.), *Linguistics: The Cambridge Survey III*. Cambridge: CUP, pp. 251-76. 1988.
- Schourap, L. and Waida, T., *English Connectives*. Tokyo: Kuroshio-shuppan, 1988.
- Smith, N. V. (ed.), *Mutual Knowledge*. New York: Academic Press, 1982.
- Sperber, D. and Wilson, D., *Relevance*. Massachusetts: Harvard University Press, 1986.
- Svartvik, J., "Well in conversation" in *Studies in English Linguistics for Randolph Quirk*. London: Croom Helm, 1981.
- Werth, p. (ed.), *Conversation and Discourse*. London: Croom Helm, 1981.

引 用 作 品

- Archer, J. *Kane and Abel* (1986)
- Corman, A. *Kramer versus Kramer* (1977)
- Greene, B. *Business Lunch* (1983)
- Lines from the Heart* (1983)
- Reflection in a Wary Eye* (1983)
- The Four of Us* (1983)
- Sheldon, S. *If Tomorrow Comes* (1985)